

— 記念講演報告 —

中嶋嶺雄氏講演

「中国をどう見るか」を聴いて

内海 禎子

日本民藝協会の全国大会では毎年魅力的な記念講演が組まれている。今年も松本のご出身で国際教養大学中嶋嶺雄学長による「中国をどう見るか」(二〇〇四・五・二九、於・ホテルブエナビスタ)がテーマで、非常に興味あるお話を伺うチャンスに恵まれた。

限られた字数で纏めるといふ依頼なので講演の内容は私なりの解釈で個条書きにし本旨については末尾に記載する先生の多彩な著書から各自お読み頂きたいと考えている。

一 中華思想

中国四千年の歴史の中で中国はずっと一つの思想、つまり「中華」、「中華帝国」という——言い換えれば中国こそ世界の中心だという同心円的な世界秩序観を持つ。即ち諸外国は朝貢の国、貢ぎ物を納める国、であり、日本も実質的にその範疇に入る。今世界中の企業が中国に投資してい

る。日本も同様である。しかし投資すればする程そのツケも拡大することを覚悟すべきである。

二、国土の広さと経済

中国はすでに十三億の人口を持つ。今日の中国は急速な経済発展を遂げている。経済成長率は七パーセント台である。かなり高度に聞こえるが実際の人口比率で考えるとまだまだ落ち込んでいる。一人当りの日本の経済成長率は中国の三十倍という計算になる。

国土の広さは日本の二十六倍である。しかし人間の住める土地は僅か日本の三倍程度しかない。にもかかわらず、中国は経済発展のために自然の大破壊を推し進め、空気の汚染も尋常でなく、水は涸れ、土地の砂漠化は急速に拡大している。中国では成長率が例えば一パーセント落ちれば一挙に七千万人の失業者が出る計算だ。そのため成長率のアップをやめるわけにはいかないというのだ。

天安門のあの悲惨な事件から十五年、学生や市民の抵抗は武力で抑えたが、民主的な開放路線に政策は変革しているのだろうか。天安門の中、紫禁城の中核は見えるようになったのだろうか。環境破壊は人権抑圧につながってはいないか。中国では若者までマネー主義になっていく。安っぽい金ぴかの文化が今の中国の文化となっている。文化大

革命から天安門事件に続く世相は日本人の持つ感性や思想の持ち方とは異質なものである。

三、中国と台湾

中国では軍事力が膨大に増加している。中華思想から台湾を見ればこの島国は「化外」であった。中国側からいえば朝貢の国にも入らないゴミのような存在で、あっても無

くてもよいような地域であった。しかし近年、台湾が発展し、ChineseではなくTaiwaneseとしての自覚が芽生えているので将来的には、中国にとって不安な要素が大きく、軍事力増強の原因になっている。

筆者註・十三億以上の人口をもつ巨大国家中国との関係は同アジア圏内の日本として、更に認識を深める必要がある。論客中嶋学長の左記著作を是非お読み下さい。(日本民藝館常務理事・日本民藝協会常任理事)

中嶋嶺雄氏略歴

東京外国語大学卒、東京大学大学院国際関係論博士課程修了。東京外国語大学学長、パリヤカリフォルニア等で客員教授を歴任。現国際教養大学学長。

主要著作

『現代中国論』(青木書店)／『中国 歴史・社会・国際関係』(中公新書)／『香港回帰』(中公新書)／『中国・台湾・香港』(PHP新書)／『北京列烈』(講談社学術文庫)／『国際関係論』(中公新書)



上／記念講演を行う中嶋嶺雄氏



左下／懇親会にて挨拶をする田中康夫長野県知事

右下／懇親会にて挨拶をする菅谷昭松本市長

